

# 沖縄県復帰記念三大事業

宮城 修

Three major projects to commemorate Okinawa's reversion

Osamu MIYAGI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第16号別刷

2023 年 3 月15日

Reprinted from the  
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.16  
March, 2023

## 沖縄県復帰記念三大事業

宮城 修<sup>1)</sup>

Three major projects to commemorate Okinawa's reversion

Osamu MIYAGI<sup>1)</sup>

### Abstract

Fifty years have passed since Okinawa returned to Japan in 1972. The number of people who experienced that time is gradually decreasing, and there is a danger that history will fade away. Okinawan residents were worried about the U.S. military bases remaining, but Okinawa Prefecture was still making a fresh start. The Arbor Planting Festival, the National Sports Festival "Wakanatsu Kokutai", and the Okinawa Ocean Expo were held to commemorate Okinawa's return, and many Okinawan residents felt the return through their daily lives. This paper was written based on materials exhibited at the Okinawa Prefectural Museum and Art Museum and official records about the commemorative project of the restoration.

### はじめに

沖縄県立博物館・美術館では2022年7月20日から9月19日まで、特別展「沖縄、復帰後。展ーいちまいでいん かなさ オキナワー」を開催した。約2か月間の会期で観覧者は1万人を超え、多くの展示品をご覧いただいた。特別展は、第1章「復帰の日ー葛藤をかかえてー」、第2章「新生沖縄県の誕生」、第3章「沖縄ブーム到来」、第4章「変化・変容と沖縄ー各分野から迫る沖縄像ー」、第5章「不変・継承・課題」、第6章「希う未来」という6つのテーマから構成した。第1章から第3章までは1972年5月15日から現代に至るまでの主だった社会的事象を時系列で紹介、第4章では自然史・人類・考古・歴史・民俗の各分野の切り口から復帰50年を捉えた展示を、第5章と第6章では復帰後も改善されないまま残っている沖縄の諸課題を取り上げるとともに、社会が変化しても変わらず継承されてきた伝統や、復帰時の沖縄が掲げた「平和で明るい豊かな」社会の実現を今後も追求していく未来創造型の展示を展開した。中でも、第2章の「新生沖縄県の誕生」では、復帰記念三大事業とともに通貨交換やナナサンマル

と呼ばれた交通方法の変更について取り上げた。米軍基地が残されたままの復帰に、県民の多くは大きな不安と不満を抱えていたが、復帰記念三大事業や通貨交換、ナナサンマル等は新たな沖縄県のスタートを切る事業として位置づけられ、県民にとっては生活実感を伴う出来事となった。現在、沖縄戦の風化が多方面から聞かれているが、復帰後の世代が人口の約6割を占める現在において復帰自体も風化されていくのではないかと危惧してる。復帰に関連した事柄は多くあるが、本稿では当館の所蔵資料や特別展の展示資料、各公式記録、記念碑等から復帰記念植樹祭、復帰記念沖縄特別国民体育大会（若夏国体）、沖縄国際海洋博覧会の概要についてまとめることとする。

### 1. 復帰記念植樹祭

復帰記念三大事業の先陣をきり、1972年11月26日、糸満市磨文仁丘の平和の広場一帯で「しあわせも、きれいな国土も、緑から」を大会テーマに復帰記念植樹祭（主催：国土緑化推進委員会、沖縄県）が開催された。本土では1950年から昭和天皇の提唱によ

<sup>1)</sup> 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1 Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

り全国植樹祭が開催されていたが、米国統治下の沖縄は参加した経験がなく、また琉球政府と日本政府との間で植樹祭の開催が決定されたのも1970年のことであり、沖縄側としては急ぎ植樹祭の準備を進めることになり頭の痛い思いをしていたのではないと思われる。開催場所は、沖縄戦における激戦地であった糸満市摩文仁丘一帯が選ばれたが、他にも名護市にある南・北明治山県有林、名護岳公園、国頭村安田の肉用牛繁殖センター附近が候補に挙げられた。これらの候補地は用地確保の困難さや交通アクセスの面などから見送られることになった。

開催の目的として、「沖縄の祖国復帰を記念して復帰記念植樹祭を開催し、これを契機に緑化思想の普及高揚と国土保全に対する認識をいっそう深め、戦災で荒廃した沖縄の森林の復旧をはかり、森林資源の培養と緑ゆたかな住みよい郷土づくりを促進する。」ことが示され、県外招待者455名、県内招待者2,628名、奉仕員807名の計3,890名あまりが参加して開催された。式典は、長井国土緑化推進委員会専務理事による開会のことばから始まり、那覇商業高校・浦添高校の吹奏楽部の演奏による国旗、大会旗、県旗の掲揚が行われた（図1）。その後、沖縄戦で犠牲となった多くの御霊に対して黙とうがささげられた。続いて、徳川宗敬国土緑化推進委員会理事長と屋良朝苗県知事が主催者あいさつを行った。屋良知事はあいさつの中で「古来、沖縄は、特に国土保全のための保安林造成に多くの努力を傾注し、戦前は緑したたる森林がいたるところに繁茂して国土を護り〈中略〉しかるに、戦争という人類最大の不幸な災禍によって、地上のいっさいのものを失ってしまった。〈中略〉本日の復帰記念植樹祭を契機として、緑化の重要性の普及啓発、住みよい環境づくりの推進、森林の公益的機能に対する世論喚起を3大基本方針として、いっそう緑化の推進に努め、若夏国体、海洋博を成功させ、平和で緑豊かな新生沖縄県の建設に全力を傾注していくことを誓うものである。」と述べ、新沖縄県発足式典で掲げた「平和で明るい豊かな」県づくりを実現するためにも、戦争で荒廃した緑を再建することが不可欠であることを示している。

以下、復帰記念植樹祭の式次第について示す。

- 一、開会のことば  
三浦国土緑化推進委員会副理事長（代理）
- 一、国旗・大会旗・県旗掲揚
- 一、黙とう
- 一、主催者あいさつ  
徳川宗敬国土緑化推進委員会理事長  
屋良朝苗沖縄県知事
- 一、来賓祝辞  
足立篤郎農林大臣  
本名武沖縄開発庁長官（代理）  
平良幸市沖縄県議会議長
- 一、記念はがき贈呈  
三池信郵政大臣（代理）
- 一、緑化功労者表彰  
屋良朝苗沖縄県知事  
被表彰者—個人12名と4団体  
天野鉄夫元琉球政府農林部長  
多和田真淳元琉球林業試験場長  
琉球林業協会  
久松小学校  
北部農林高校 等
- 一、感謝状贈呈  
徳川宗敬国土緑化推進委員会理事長  
被表彰者—大田政作元琉球政府行政主席  
園原咲也（沖縄近代林業の父）  
与那原中学校
- 一、大会決議  
屋良朝苗沖縄県知事
- 一、参加者全員による植樹  
リュウキュウマツ3,600本
- 一、閉会のあいさつ  
宮里松正沖縄県副知事



図1 復帰記念植樹祭会場「沖縄県公文書館所蔵」

植樹祭に係る記念事業の一環として、県内市町村では記念造林と記念植樹が行われた。造林については10市町村において約41haを民有林造林奨励事業として造林し、植樹についてはシマナンヨウスギの苗3,700本が配布された。また、記念誌として沖縄県農林水産部の編集による『沖縄の林業史 復帰植樹祭記念誌』と『沖縄の林業 復帰記念植樹祭記念誌』がそれぞれ刊行された。『沖縄の林業史』はB5判125頁に及び、沖縄林業の概説について初代琉球林業試験場長で戦後の沖縄考古学の第一人者でもある多和田真淳が旧藩時代を、元琉球林業試験場長の津波仁栄が戦前期を、元北部林業事務所長の仲村松助が戦後期をそれぞれ執筆している。『沖縄の林業』はA4判50頁からなる写真集で、知事公室広報課のカメラマン平良幸七が撮影を担当した。他にも『沖縄の林業 復帰記念植樹祭特集号』（B5判31頁）が発行され、沖縄の森林の現況や天野鉄夫の特別寄稿「蔡温とその時代の林業技術」等が掲載されている。



図2 『沖縄の林業史』『沖縄の林業』『沖縄の林業（特集号）』

植樹祭のシンボルマークは、岩手県のデザイナー及川利臣によって考案された。シンボルマークは沖縄の「お」の字を図案化し、若木が強烈な南の太陽の光を受けて、大地に根をふん張り、勢いよく伸び立つイメージを表現している。また、植樹祭の広報用ポスターは若夏国体や海洋博のポスター、オリオンビールのロゴマーク等を手がけた岸本一夫と、同じく海洋博のポスター等を手がけた宮良薫のデザインによるもので、沖縄県が発行した『復帰記念植樹祭記録』の表



図3 復帰記念植樹祭シンボルマーク

紙にも使用されている。

戦争により沖縄の豊かな森林は焦土と化し、また戦後復興による木材需要の高まりが森林資源の乱伐を招いた。そのため、荒廃していく森林資源の復興を図る取り組みが進められたが、皮肉にもそれは米国軍政府の政策によるところもあった。琉球列島米国軍政府は毎年2月18日から25日までの1週間を「愛林週間」とする特別布告を1950年11月22日に定め、戦後の緑化運動を本格的に推進していった。同布告による初の愛林週間を迎えた1951年2月20日には、第1回軍官民合同記念植樹祭（大会テーマ：荒れた郷土に希望の植樹）が旧小禄村のガジャンビラで開催された。大会は毎年開催され、1965年の第15回大会からは日米琉合同記念植樹祭に名称を変え、復帰後の1973年からは現在の沖縄県植樹祭となっている。県側においては、1953年に民立法による森林法が公布され、1959年琉球政府経済局内に全琉緑化推進運動本部が設置された。復帰前そして復帰後も続く緑化運動を通して戦争で荒廃した森林は次第に回復し、平和で緑豊かな新生沖縄県が少しずつ実現してきたのではないだろうか。

## 2. 復帰記念沖縄特別国民体育大会（若夏国体）

1973年5月3日から6日までの4日間、奥武山運動公園陸上競技場を主会場に県内11市町において、「強く明るく新しく」をスローガンに復帰記念沖縄特別国民体育大会（主催：財団法人日本体育協会、文部省、沖縄県）が開催された。本大会のテーマは「若夏国体」であり、その設定理由として、「若夏とは、沖縄の言葉で初夏を意味する。沖縄の初夏の明るく、たくましく、新生の気にみちた感触をよく表した言葉として古謡に多く用いられた詩でもある。沖縄県民祖国復帰にあたって、その文化的特質をもって日本文化に貢献しようとの誓いをもっている。昭和48年、沖縄特別国体は、ときあたかも、この若夏の季節に開催される。この行事を、沖縄復帰によって、日本文化がいよいよ創造発展をたどることの象徴にすべく、これを若夏国体とする。」としている。また、スローガンに掲げられた「強く明るく新しく」はそれぞれテーマカラーと結び付けられ、「強く…自然と歴史の試練に耐えて」は“赤”（沖縄の自然と歴史のきびしさは島痛みという言葉で表現される

が、この苦難によくとえて、民族は生きぬいてきた。復帰後いよいよ、この経験は生かされなければならない。）、「明るく…明日に平和を」は“青”（亜熱帯の海にかこまれた島々で、人々は苦しい生活のなかにも底抜けに明るい人情とそれに根ざした文化を生んだ。これは明月の日本と世界の平和をねがうところの象徴にもなる。）、「新しく…新生、創造の意気を持ち」は“緑”（72年復帰によって沖縄は、新しくならなければならない。それは日本をも新しくするものでなければならない。若夏国体でそのエネルギーを発掘しよう。）となり、“赤”“青”“緑”というテーマカラーを網目のように密接に組み合わせて聖炎マークを支えしめるデザインとなったシンボルマークにも反映されている。

国民体育大会の歴史は1946年から始まるが、米国統治下の沖縄が国体に初参加したのは1952年の第7回大会で、祖国復帰の希望を込めての出場となった。同大会には、オープン参加という形式で陸上競技の15名が出場し、19歳未満男子走高跳3位、40歳未満男子100m 5位という成績を残した。その後、毎年参加を果たし1962年の第17回大会からは正式参加となった。若夏国体の開催が正式に決定したのは、復帰前の1971年のことであり、日本政府、琉球政府、日本体育協会、沖縄体育協会の合意により1973年開催が決定した。



図4 若夏国体シンボルマーク

実施にあたっては、1) 体育施設を整備し、スポーツを通じて県民の体力向上と健康な精神づくりを推進する。2) 関連する道路施設等を整備し県勢発展の基盤とする。3) 大会参加者を歓迎し、広く県の実情を紹介し、これを機会に全国各都道府県との親善を深める。4) 沖縄県民ひとりひとりが全国同胞との連帯において明るく秩序正しい誇りある社会を建設するように県民運動を展開する。の4点が目標とされた。スポーツの振興は勿論であるが、後の沖縄海洋博の項でも述べるように、立ち遅れている社会整備基盤を充実させることも目的となっていた。

例をひとつ挙げると、旧コザ市では3競技が開催されるため、国道58号線とコザ運動公園を結ぶ県道23号線（国体道路）が整備された。北谷町の上勢頭北公園には上勢頭地区の土地区画整理事業を記念した「拓」の石碑が建立されており、国体道路開通に関する記述が刻まれている（図5）。また、宮里松正沖縄県副知事を本部長とする若夏国体県民運動推進本部が組織され、1)「きれいな郷土」にしよう、2)「明るい郷土」にしよう、3)「健康なからだ」をつくろう、4)「郷土を理解し沖縄にほこり」をもとう、の目標のもと、緑と花いっぱい運動や事故をなくする運動等、地域ぐるみ、職場ぐるみ、学校ぐるみの沖縄百万県民総参加の運動が展開された。



図5 北谷町上勢頭北公園「拓」の石碑

大会に先だち、1973年4月24日から10日間の日程で県内各地を巡る炬火リレーが行われた。竹富町波照間美底御嶽（「若夏国体採火の地」の碑が建立）で採火された炬火は八重山諸島、宮古島を周った後に沖縄本島を一周し、5月1日午後3時頃、那覇市の県庁前に到着した。県庁前では炬火の到着式も盛大に行われた。県内38市町村を結ぶ全行程約872km、総勢7,619名の走者による炬火リレーだった。そして、5月3日午後1時25分に始まった開会式の炬火点火が最終走者の永吉律子によって行われた。現在、奥武山公園・奥武山総合運動場内にある陸上競技場の一角に、若夏国体の炬火台が横たわっている。管理事務所によると、2013年に炬火台の土台が崩れ、安全管理のために切り取って置いているとのことだった。

## 開会式次第

### 集団演技

緑の若夏（小学校班）、黒潮にいどむ（中学校班）

御万人そろって（婦人班）

競技団体旗入場、吹奏楽団・競技役員団入場

#### 一、開式通告

一、役員選手団入場：宮里副知事先導、県花贈呈

一、開会宣言：屋良朝苗県知事

一、大会旗・炬火入場、炬火点火

#### 一、旗の掲揚

国旗、大会旗、競技団体旗、沖縄県旗（「沖縄県民の歌」演奏）、都道府県旗掲揚

#### 一、あいさつ

石井光次郎大会長、奥野誠亮文部大臣

#### 一、祝辞

坪川信三沖縄開発庁長官

桑原幹根全国知事会会長（代理）

#### 一、歓迎のこたば

平良幸市県議会議長

平良良松那覇市長

児童代表（与儀小学校：下地直美）

#### 一、選手代表宣誓

前大光男（沖縄県、陸上）

#### 一、若夏国体の歌唱

#### 一、閉式通告

役員選手団退場、吹奏楽団退場

### 集団演技

エイサー（中頭郡内青年）、空手（全沖縄空手道連盟38道場）、踊る若人（高校班）

各団体による郷土色豊かな集団演技は会場に詰めかけた約3万人の観客を魅了し、県外から参加した選手団に沖縄の文化・芸能を紹介する機会となった。特に児童・生徒らによる集団演技は創意工夫が凝らされ、これまでの練習の成果が十分に発揮できたのではないと思われる。限られた期間ではあったが、放課後等も利用し練習に励んだ。那覇市内の女子高校生約2,300人が演じた「踊る若人」に参加した桑江弘子さん（当時、首里高校2年生）は、「暑い中の練習だった。他校の生徒と合同で行う演技であったため、練習やりハーサルも時間をかけてやった。衣裳と記念章（バッジ）は配布されたものだった。」と振り返っていた。桑江さんからは、集団演技で着用した衣装を2022年8月にご寄贈して頂いた（図6）。



図6 集団演技で使用した衣装

いよいよ、21競技34種目に3,342名（内、沖縄県376名）が参加し、熱戦の火ぶたが切って落とされた。通常の国体は都道府県対抗となっており、総合優勝の都道府県には天皇杯が、女子総合優勝の都道府県には皇后杯が授与されることになっているが、若夏国体に限り天皇杯と皇后杯を競わない特別国体という位置づけだった。そのため、本戦に出場するための地方予選がなく、競技ごとに参加都道府県が割り当てられた。高校野球を例に挙げると、出場したのは栃木県（作新学院）、石川県（星稜）、岐阜県（中京商）、山口県（岩国）、高知県（高知商）、宮崎県（宮崎実）、沖縄県（前原、豊見城）の7県であった。また、開催県である沖縄は全ての競技に出場した。競技が始まると連日のように県勢が活躍し、ボクシングでは後にWBAジュニアフライ級王者となり13度の防衛に成功した具志堅用高も出場した高校男子が優勝、バスケットボールでは教員男子チームが優勝、重量挙げではフライ級とミドルヘビー級の2種目で優勝する等の成績を残した。これらの競技は現在でも実績を残しており、若夏国体を前後して培ってきた土台が実を結んでいる結果なのではないだろうか。以下、県勢の成績について示す。

#### 優勝—高校男子ボクシング

一般男子鉄棒（玉那覇清淳）

教員男子バスケット

重量挙げフライ級（平良文男）

重量挙げミドルヘビー級（渡慶次享）

教員個人相撲（赤嶺俊雄）  
一般男子弓道近的  
高校男子剣道（那覇高校）

沖縄県勢は7競技で計8つの優勝、8競技で合計10の準優勝、5競技で計6つの3位という成績を残した。5月6日午後12時53分からは、閉会式が開催され、若夏国体の熱い戦いの全日程が終了した。

#### 閉会式次第

##### 集団演技

競技団体旗入場、吹奏楽団・競技役員団入場

一、開式通告

一、役員選手団入場

一、大会長あいさつ

一、国旗、大会旗、競技団体旗、沖縄県旗（「沖縄県民の歌」演奏）、都道府県旗降納、炬火滅火

一、閉会宣言（沖縄県体育協会会長）

一、閉式通告

フィナーレ

若夏音頭、安里屋ユンタの踊、カチャーシー  
交歓の場、退場行進（蛍の光）

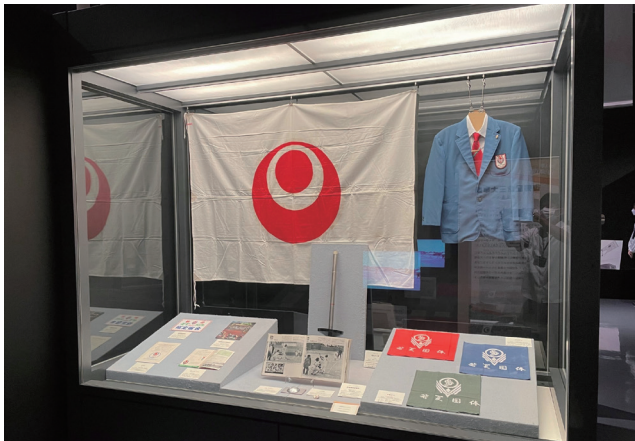


図7 特別展で展示した若夏国体の資料

大会期間中、自衛官の大会出場に抗議する集会が一般男子軟式野球の会場であるコザ市営球場と重量挙げの会場である北部農林高校で開かれ、機動隊と衝突する出来事があった。両会場ともに機動隊が抗議団を排除して試合は進められたが、復帰後すぐに自衛隊の県内配備が進められたことに対する県民の

強い反発の表れでもあった。だが、若夏大会の理念にスポーツの振興、誇りある社会の実現、他府県との親睦等があり、大会を通して多くの交流が見られたことも事実である。復帰前の1958年、県勢で初めて甲子園大会に出場した首里高校野球部が甲子園の土を沖縄に持ち帰ろうとしたところ、植物検疫法にふれるという理由で那覇港にて廃棄させられた。奥武山公園内の一角には「友情の碑」が財団法人日本体育協会によって建立されているが、各都道府県選手団がそれぞれの郷土の土を持ち寄りこの碑を盛り上げて設置している（図8）。戦後27年間の米国統治によって本土と分断された沖縄にとって、若夏国体は本土との交流が再開する契機ともなった。



図8 奥武山運動公園内「友情の碑」

### 3. 沖縄国際海洋博覧会

1975年7月20日から1976年1月18日まで、復帰三大事業の締めくくりとして、また、沖縄経済や地域振興の起爆剤としての役割を担う沖縄国際海洋博覧会（主催：国、運営：財団法人沖縄国際海洋博覧会協会〔会長：大濱信泉〕）が本部半島西北部を会場に開催された。海洋という特定の分野を対象とした世界初の国際博覧会であり、「海—その望ましい未来」のテーマの下に36か国、3国際機関、1非公式（オランダ領アンティル）が参加した。海洋という分野での開催となった理由として、1）人類の海洋への関心の高まり、2）世界的な海洋開発の推進、3）わが国の海洋開発の推進、4）沖縄と海洋とのつながり、の4点が挙げられ、中でも4）沖縄と海洋のつながりについては、「沖縄にはまだ汚染されていない美しい海とサンゴ礁があり、亜熱帯の太陽があり、将来の開発可能性を秘める大陸棚がある。黒潮という世界の代表的な海流の只中にあり、台風

を含む複雑な海洋気象に囲まれている。このような沖縄こそ海洋に関する探求の入口であり、また海を祭る場としてふさわしいものと思われる。」と示されている。沖縄は160の島々からなる島嶼県であり、琉球王国時代あるいはそれ以前にも海の道を利用して海外との交易をさかんに行った。また、古くから海のかなたにあるとされるニライカナイに祈りを捧げ、現在でも海は信仰の対象となっている。海洋をテーマにした博覧会は、地理的・歴史的・文化的にも沖縄に最も適したものとなった。

日本初の万国博覧会である大阪万博が開催された1970年に通商産業省による海洋博の構想が明らかになると、8月には琉球政府が日本政府に対して沖縄開催を正式に要請し、1971年10月の閣議でそれが了解された。同年11月には国際博覧会事務局理事会（B I E）で開催の申請が受理されている。1972年2月沖縄国際海洋博覧会協会が発足し、会場も本部半島に決定した。会場の選定にあたっては会場用地選定委員会が設置され、豊見城村から糸満市に及ぶ海上案と読谷村残波岬案もある中、全会一致で本部半島案に決定している。そして、1972年3月には他のB I E加盟国からの異議がなく、正式に開催が決定する運びとなり、4月には統一テーマが決まり、5月には開催時期（1975年3月2日から8月31日まで）が閣議決定した。だが、実際には世界的なオイルショックのあおりを受け、日本政府による総需要の抑制と公共事業の繰り延べの方針が示され、1975年7月20日からの開幕（1973年12月閣議決定）となった。また、1965年に佐藤栄作首相が沖縄を初訪問した際に特別顧問として同行した石垣島出身の大濱信泉は、沖縄返還協定が参議院で承認可決された1971年12月に佐藤首相を訪ね、非公式ながら海洋博開催協力の打診を受け、その後沖縄国際海洋博覧会協会の会長となっている。

海洋博の開催にあたっては、会場建設だけでなく道路・空港・港湾・下水道等、関連する公共事業も推進された。那覇・名護間の国道58号線の拡張整備、石川・名護間の北部縦貫道路（高速道路）の建設、那覇空港の滑走路延長とターミナルビル建設の他、伊江空港、石垣空港、宮古空港、運天港、渡久地港、平良港、石垣港といった離島・僻地地域の交通インフラの整備も同時に進められた。総額約1,800

億円に及ぶ公共事業により県民生活の利便性は向上し、海洋博を機会に建設された大型ホテル等とともに、その後の観光産業発展の土台となった。しかしながら、開発にともなう自然環境への影響や文化財保存の問題等が顕在化し、自然や歴史・文化を維持しながらいかに開発を進めるべきなのか、沖縄の社会への問題提起となった。

1975年7月19日午後2時、海洋博名誉総裁皇太子殿下（現在の上皇殿下）のご臨席のもと、三木武夫首相、河本敏夫通産相（海洋博担当）、屋良朝苗県知事等をはじめ、各参加国代表、参加国際機関代表ら国内外の招待者約2,000名が出席し、越智度男海洋博協会事務総長の開式宣言により開会式が挙行された。屋良知事は歓迎のあいさつの中で、沖縄と海の間わりを紹介しつつ、「（海洋博が）人類協和の広場として、実りある成果をおさめ、親善と友好を深め、世界の恒久平和と人類の限りない繁栄に寄与してくれるよう心から念願」と述べ、世界平和の実現にむけたアピールをしている。同日午後7時から前夜祭が行われ、沖縄の歌三線・空手・獅子舞等の伝統芸能、ハーリー船とサバニ船団のパレード、水上スキージの演技、ハワイアンダンス、プラハ少年少女合唱団による合唱等が披露された。中でも世界の7つの海の海水をひとつにする儀式では、日本航空の stewardess 7人がそれぞれの海から持ちよった海水を甕の中に注ぎ、最後に地元の中学生金城恵理子さんが沖縄の海の水を加えて、世界の海が一体化した。最後は、大噴水にEXPO'75の文字が映し出されながら大きな花火が打ち上げられ、ここに183日間にわたる海洋博がスタートした。

海洋博には各参加国以外にも国内の民間企業による展示もあり、計53の出展となった。会場はテーマに基づき魚のクラスター、民族・歴史のクラスター、科学・技術のクラスター、船のクラスターというエリアに分けられた。沖縄県からは「沖縄館」（実施主体：財団法人沖縄県観光開発公社）が出展され、海とのつながりを中心に歴史・文化・民俗に関する資料1,133点が展示された。テーマは「海やかりゆしー波の声もとまれ風の声もとまれ」。古来より海の恵みを享受し、また海によって文化が運ばれてきたことを「かりゆし（めでたい）」で表している。また、近世琉球を代表する国王尚敬王が北部巡幸で

恩納間切に立ち寄った際、女流歌人の恩納ナビが詠んだ歌に「なみぬくいんとまり かじぬくいんとまり しゅいてんがなし みゆんちうがま」があり、その意味である「波の声もとまれ 風の声もとまれ 国王様の顔を 恭しく皆でおがみましょう」をもとにサブテーマが選定された。若夏国体の項でも紹介した竹富町波照間美底御嶽にある「若夏国体採火の地」の碑の碑文にも「波の声も止まれ風の声も止まれ」が刻まれ、時を止める静寂性をもった句として使用されている。沖縄館のテーマにおいては公害や戦争など海にとって脅威となるものに対する制止を祈ったものとなっている。なお、沖縄館の表札やポスター、ガイドブック等で見られる「海やかりゆし」の題字は、植樹祭の項で紹介した岸本一夫が手がけている。沖縄館の展示構成は以下のとおり。

#### 第一室 ～海やかりゆし～

- ・ニライカナイの空間 ・原おきなわ
- ・ヒシの漁撈 ・沖合漁撈 ・追込漁法
- ・つな引き・グシク・大交易時代・琉球の文化財

#### 第二室 ～波の声もとまれ、風の声もとまれ～

- ・閉ざされた海 ・戦塵の中から

#### 第三室 映像室

- ・美らさー琉球の遺宝 ・かりゆしの島ーおきなわ

特別展では海洋博に関する資料として公式グッズや記念メダルなど多くの資料を展示し、当時の雰囲気を感じていただくことができた。その大部分は当館収蔵の資料となっているが、今回、アクアポリス模型と海洋博ユニフォームを県外からお借りし、展示した。

##### (1) アクアポリス（日本政府出展）

未来の海洋都市をイメージした世界最大級の海洋構造物で、構造物そのものが1つの展示物として位置付けられ、海洋博を象徴する存在となった。高さ約30m、縦横約100mあり、4基のローワーハル（基礎構造物）の上に直径7.5m、高さ20mのコラム（支柱）が合計16本立つ半潜水浮遊式構造となっている。設計は菊竹清訓建築設計事務所と日本海洋開発産業協会、製造は三菱重工広島造船所江波工場。総工費約123億円。アクアポリスは発電、造水、下水処理、廃棄物処理機能を備え、食料を供給する海洋牧場を周囲に配置する自給自足の海洋都市をコンセ

プトとし、海洋開発の粋を集めた実験的な要素を有していた。設計にあたった菊竹清訓は、アクアポリスの展示・演出プロデューサーの手塚治虫との座談会で、アクアポリスについて「アクアポリスの魅力は、その威容もさることながら、世界で初めての海上実験都市を作ろうとするひたむきな姿勢だと思うんです。それだけに、たどたどしいわけなんです。けれども、そのたどたどしさを体験することは、これまでの日本にはあまりなかった。自動車、エレベーター、ビルなど、全部完成されたものを輸入して使っているわけです。アクアポリスはそうじゃなくて、技術を集大成して新しいものを作りあげるといふ、その苦勞を知ってもらいたい。」（『海洋博ニュースNO.16』1974年より引用）というふうに述べている。アクアポリスは当時最新の海洋科学技術を駆使して、海洋博の理念の1つでもある「海洋開発」を具現化したものとなった。特別展では東京都に所在する株式会社情報建築が所蔵する100分の1スケールのアクアポリス模型を展示した（図9）。3層から成るデッキの外観、ローワーハルやコラムの形状、アクアポリスと陸側のアクア大橋を結合する通路部分等が精巧に表現され、現在では見るができなくなってしまう在りし日のアクアポリスを、思い起こすことができる貴重な資料である。

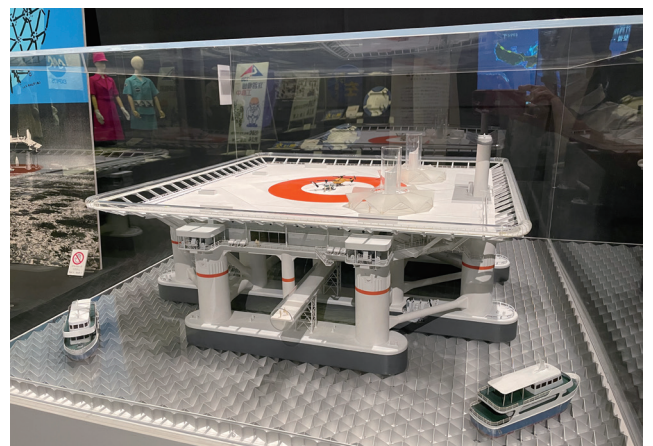


図9 特別展で展示したアクアポリス模型

##### (2) 海洋博ユニフォーム

海洋博では各パビリオンのコンパニオン以外に協会職員、警備員、環境整備員、協賛売店員等、数10種類に及ぶユニフォームが制作された。ユニフォームの制作にあたっては企画懇談会（委員長：今枝信

雄、委員：森英恵など13名）が基本方針を作成し、一般公募と指名コンペでデザインを募った後、審査委員会において応募総数158点の中からそれぞれ採用決定された。特別展で展示したユニフォームは、統一式典用、海洋文化館用、水族館用、本部町商店街用のオリジナル資料4点（図10）で、いずれも東京都にある内閣府認定公益財団法人日本ユニフォームセンター（NUC）の所蔵である。NUCは国内で開催されてきた万博のユニフォームを保管しているが、1970年開催の大阪万博のユニフォームはレプリカサンプルしかないため、NUC内において最も古いオリジナルの万博ユニフォームが海洋博のものであるとのことだった。そのため、オリジナルのユニフォームを展示することは当館にとって貴重な機会となり、ユニフォームにとっても里帰りのような意味合いをもつことになった。統一式典用は海と波をイメージし、デザイナーの鈴木紀夫とNUCがデザインを手がけた。海洋文化館用はデザイナーの中村乃武夫とNUCによる考案で、花々の色をイメージし、ショッキングピンクの夏型にエメラルドグリーンの合型が制作された。水族館用は沖縄の民芸品であるミンサー柄を取り入れ、水族館のテーマカラーであるエメラルドグリーンを配している。デザインは一般公募の中からNUCがアレンジした。本部町商店街用は空と海を表す青に、くだける白い波しぶきを図案化している。デザインはNUCが手がけた。また、海洋文化館用は沖縄三越が、商店街用は沖縄山形屋がそれぞれ制作した。



図10 特別展で展示した海洋博ユニフォーム  
左から商店街用、海洋文化館、水族館、統一式典用

海洋博では広報活動としてシンボルマークとマスコットマークがそれぞれ作られている（図11）。シンボルマークは大阪府のグラフィックデザイナーである永井一正が考案。円は人類の協調と平和を意味し、中央の白線は海洋に大きくうねる波、下のマリンプールは広大な海、上のスカイブルーは海に接して、どこまでも広がる空を表している。マスコットマークは新潟県のグラフィックデザイナー亀倉雄策が考案。イルカをデザインし、海洋博の楽しさをより広くアピールするというのが込められている。「オキちゃん」の愛称で親しまれ、1973年10月17日に発表された。（「オキちゃん」名での応募が73通あり、抽選の結果松川小4年の比嘉智美さんが当選）



図11 海洋博シンボルマークとマスコットマーク

1976年1月18日、183日間にわたる会期が終了した。来場者数の目標であった450万に及ばない約350万人の来場であったが、国内外の多くの人々が人類と海洋の関わりや海洋開発についてふれ、何よりも沖縄を訪れることで自然・歴史・文化の素晴らしさを見聞きし、体験する絶好の機会となった。閉会式のあいさつの中で屋良県知事は「この感動的な貴重な経験を沖縄県民の永遠の誇りとし、今後県民は、この美しい沖縄の海を守り、そして郷土の限りない繁栄と発展のために、さらに自信をもって精進してくれるものと思います。〈中略〉世界各地から多くの観客が沖縄に来訪され、沖縄の風物にふれ、身をもって沖縄への理解を深め、そして国を越え、民族を越えて、たがいに友情を深め合い、世界はひとつという情感にひたりながら友好親善の実をあげ、重大な役目を果たし得たことは、まことに意義深いものであります。〈中略〉この海洋博の成果により、高まってきた人類の母なる海を守り育てて、世界の平和と繁栄に結びつけようとする「望ましい未来の

海」の創造への意欲と熱意は、必ずや実を結び、世界各地で豊かな実績をあげるものと確信いたします」と、海洋博開催の成果を振り返っている。海洋博については、開発と公害、本土企業等による土地の買い占め、倒産や失業等の海洋博後の反動的な景況の落ち込み等の課題が露呈し、県民生活への影響が少なからずあったことも確かだった。しかし、海洋博の2年後にあたる1977年には入域観光客数が初めて100万人を突破し、その後の沖縄振興や観光産業の発展に大きく寄与したといえるのではないだろうか。

#### 4. おわりに

米軍は戦後まもなくして沖縄を「太平洋の要石」として位置づけ基地化を進めていった。1953年には土地収用令を公布し、住民の財産である土地を強制的に接収し軍事基地建設を本格化させていく。その過程で島ぐるみ闘争が起こり、土地をめぐる住民と米国との闘いが始まった。1960年には、沖縄県祖国復帰協議会が発足し、沖縄の本土への復帰運動が高まっていった。高まる沖縄県民の要求に対して、日米両政府は施政権返還に向けた協議を重ね、1972年5月15日沖縄の本土復帰が実現した。復帰を実現した沖縄にも日本国憲法をはじめとする諸法令が適用され、県民生活も変更を余儀なくされた。その代表例が通貨交換や交通方法の変更であった。復帰に伴う沖縄振興策により、立ち遅れている社会資本が整備され県民はその恩恵を享受していくが、それでも埋まらない本土との経済格差は現在でも課題となっている。また、県内に集中する米軍基地の存在も基地なき本土復帰を求めた50年前と変化が少ない。本稿では復帰記念三大事業について拙著ながら概要をまとめた。祝賀的な要素が強い復帰三大事業についてまとめたが、復帰したにも拘わらず残されてきた問題にも目を向け、今後の調査・研究の課題とした。

#### 5. 謝辞

沖縄県立博物館・美術館特別展「沖縄、復帰後。展－いちまでいん かなさ オキナワ－」の開催にあたり、関係各位の皆様より多くの資料を借用させて頂きました。株式会社情報建築のスミス睦子様（ア

クアポリス模型）、公益財団法人日本ユニフォームセンター様（海洋博ユニフォーム）をはじめ、御協力頂きました皆様へ御礼申し上げます。

また、特別展を機に、若夏国体の衣裳を御寄贈頂きました桑江弘子様にも感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 沖縄県農林水産部『沖縄の林業史 復帰植樹祭記念誌』1972年  
沖縄県農林水産部林務課内復帰記念植樹祭本部『沖縄の林業 復帰記念植樹祭記念誌』1972年  
沖縄県農林水産部林務課内復帰記念植樹祭本部『沖縄の林業 復帰記念植樹祭特集号』1972年  
沖縄県農林水産部林務課『復帰記念植樹祭記録』1973年  
公益社団法人沖縄県緑化推進委員会『沖縄県緑化運動65年史』2014年  
沖縄県特別国体事務局『復帰記念 沖縄特別国民体育大会 若夏国体』1973年  
沖縄県特別国体事務局『県民運動の手びき』1973年  
コザ市『コザ市史』1974年  
通商産業省『沖縄国際海洋博覧会の記録』1976年  
沖縄県『海－その望ましい未来 沖縄開催のあゆみ』1976年  
財団法人沖縄海洋博覧会協会『沖縄国際海洋博覧会公式記録（総合編）』1976年  
財団法人沖縄県観光開発公社『海やかりゆし－沖縄館ガイドブック』1975年  
財団法人沖縄国際海洋博覧会協会『海洋博公式ユニフォームガイド』1975年  
財団法人沖縄国際海洋博覧会協会『海洋博の果たした役割』部内資料 1976年  
復帰20周年記念式典推進本部『復帰20年のあゆみ－21世紀への道標－』1992年  
沖縄県立博物館・美術館『復帰50年特別展 沖縄、復帰後。展－いちまでいん かなさ オキナワ』2022年  
宮里松正『復帰二十五年の回想』1998年 沖縄タイムス社  
長田亮一『元早稲田大学総長 大濱信泉の生涯』1994年